

三月十一日の地震からまもない頃、余震やテレビのニュースが伝える福島原発での爆発に怯えながら、ひとり東京都内の自宅でリュックサックに最低限の荷物をまとめていた。住まいは賃貸アパートの一室だが、部屋にある様々な個人的歴史に息づく物を失うことを想像して、いたたまれない気持ちになっていた。そのとき、部屋の片隅の本棚に差し込まれた一冊の文庫本の中では、ある人物がこう言っていた。

「そうだな。なんでも自分のものにして、もってかえろうとすると、むずかしいものなんだよ。ぼくは、見るだけにしてるんだ。そして、立ち去るときには、それを頭の中へしまっておくのだ。ぼくはそれで、かばんをもち歩くよりも、ずっとたのしいね」^{【*1】}

自由と孤独を愛する旅人、スナフキンである。一年中テント暮らしの彼は、物に縛られることを嫌い、もちろん家も持たない。「ぼくは、あっちでくらしたり、こっちでくらしたりさ。きょうは、ちようどこにいたただけで、あしたは、またどこかへいくよ」^{【*2】}。そんなスナフキンの生き方は、ムーミンと

ロールのみならず、多くの人のあこがれだろう。しかしまた多くの人にとって、それはあくまであこがれであり、現実にはそれぞれに家があり、物を所有している。物語の世界にしても、ムーミン谷のムーミン屋敷という愛すべき定住の場所があるからこそ、スナフキンの放浪の生き方が輝くにちがいない。建築は誰のものだろうか。本誌ではこれまで、どちらかという建築を公的に捉えることに意義を感じていた。つまりひとつには、建築が建てられ、建ち続けるなかで、共時的に、それが多くの人間と関係せざるをえない社会的な存在であるから。そしてもうひとつは通時的に、その建築に含まれる文化的性が、その建築に関わる人々を歴史的な文化的世界に位置づけるから。

しかし、今回の大地震に端を発する一連の災害では、多くの人がそれぞれ私的に所有していた建築を失った。当然ながら、〈私〉あるいは〈私たち〉の物だからこそその建築の価値も、無視できるものではない。問題は政治や経済などの分野にまたがって根が深いが、この号ではあらためて「建築の持ち主」について考えてみたい。

スナフキンは、ぼうしを、テーブルと台所のドアの中間の、ゆかの上において、にやにやわらいながらいました。「そら、こややくずいれにしたらどう。これまた、財産が一つ、ふえるわけだものね」こんな皮肉をいったのは、スナフキンにとっては、どうしてみんなが持ち物をやたらにほしがるのか、わけがわからなかったからです。スナフキンときたら、生まれたときからきている古シャツマイいで、すみからすみまで幸福だったので。

へムレンさんだって、スナフキンが看板ぎらいのことぐらい、きいているはずでした。なにしろ、立入禁止とか、境界とか、閉鎖とか、しめだしとか、ひとりじめをあらわす感じのことばは、なにがなんでも、スナフキンは大きらいなのです。——スナフキンのことを、すこしでも気をつけている人だったら、この世の中には、たった一つだけ、スナフキンをおこらせ、かなしませ、きちがいみたいにさせるものがある——それは看板だってことを知っているはずでした。

スナフキンは、家々のうら庭のすみっこを、足音をしのばせて歩いていきました。物かげにかくれながら、こっそり、なりをすずめてすすみました。だけれども口をききたくなかったのです。大きな家も、小さな家もありました。どれもこれも、くつきそうなおうすでならんでいました。くつついてしまっている家もありました。その家は、となりと、屋根も、といも、こみ箱まで共同でした。となりの家のまどの中がまる見えで、となりの食べもののおいまで、よくわかりました。おなじようなえんとつと、高い切りづまと、井戸のポンプがならんでいる下に、家から家へ通じている、すりへった道がありました。スナフキンは、音もたてずに、すばやく歩いていきながら、思いました。「家ってやつは、どいつもこいつも、気に入らないな」

（この場所は、だれのものでもなくて、みんなのものだ、と。するとぼくの場所でもあるんだな。と。ころでなにをしようか）
考えは、いつものように、すぐにかびました。カチツというような音がして、とたんに思いついたのです。ここにひとりのムーミンがいる。場所があるというのなら、家を一軒たてることは、いわずと知れたことです。

「ママ、ちよつとこういうことを想像してみよ。ママがとでもすばらしい場所をみつけて、それを自分のものにしたと思つたのに、そこにはもたら大ぜいのものが住んでいて、ほかへはひっこしていこうとしないことがわかつたとするの。そのくせ、せいづらには、その場所がどんなにすばらしいところか、わかりもしないんだよ。そういうばあいでも、その連中には、そこに住む権利があるの？」
「もちろん、ありますとも」

「あなたは、どこに住んでるの」と、そのとき、スノークのおじょうさんがききました。「ぼくは、すこきれいな谷で、パパとママとくらしてのさ。ぼくらの家は、パパが自分でたてたんだよ。青い家でね。家を出発するちよつと前に、ぼくは、庭へぶらんこをつくつたよ。きみのために……」
「あんなこと、いつてらあ。いまはじめて、出会つたのに」
と、スニフがちゃかしました。

ママのへやは東むきでした。ママは朝がすきなんです。パパのへやは西むきでした。夕空をながめると、パパはいつもロマンチックな気持ちでいっぱいになるからでした。

※出典：すべてトーベ・ヤンソン著、講談社文庫
【*1】『ムーミン谷の彗星』下村隆一訳、1978、p.51 【*2】同p.44 [下段] 右から、『たのしいムーミン一家』山室静訳、1978、p.24 / 『ムーミン谷の十一月』鈴木徹郎訳、1980、pp.14-16 / 同p.123 / 『ムーミン谷の彗星』pp.103-104 / 『ムーミンパパの思い出』小野寺百合子訳、1980、p.37 / 『ムーミンパパ海へいく』小野寺百合子訳、1980、p.93 / 『ムーミン谷の十一月』p.152